

日本人にも外国人にも住みやすいまちの魅力について ーシビックプライドを醸成する多文化共生のまちづくりー

常葉大学 外国語学部・教職大学院 「多文化共生ゼミ」
指導教員：教授 星野洋美 / 准教授 江口佳子
参加学生：田中優衣、森下莉紗、増田里花子、
浅沼芳華、松本双葉

1 要約

すべての住民（多様な文化的背景を持つ住民を含む）が居心地が良いと感じられるまちをつくること、そして多文化共生の実現に取り組むまちを住民が誇りに思うことが大切であるという考えの下、まず外国人住民と日本人住民を対象にした多文化共生意識を育む取組の現状を参与観察や質問調査により明らかにし、シビックプライドの醸成という観点で取組の成果と課題を検討した。その結果、現在のまちづくりのための市民団体への支援、外国人住民への様々な支援（外国につながるのある子どもの日本語支援や学習支援など）、そして多文化共生講座等の市民協働型の取組が、菊川市における『シビックプライドの醸成』に有効であることがわかった。次に、様々な活動の参加し得た知見をもとに、菊川市の特徴や魅力を取りまとめ、菊川市の良いところを紹介するプレゼンテーション用のPPを作成した。

2 研究の目的

本研究の目的は、菊川市において、多文化共生推進に向けた取組を行っている多様な市民団体等の活動内容および成果を明らかにし、その結果から見出せた市の特徴や魅力を「日本人にとっても外国人にも住みやすいまち」というコンセプトで取りまとめ、市内外に効果的に発信できる方法を検討することである。

菊川市の人口は47,720人で、その内の外国人人口は3,544人である。外国人が全人口に占める割合は約7.43%で、県内第1位となっている（2022年3月31日現在）。人口減少・少子高齢化が進展する中、外国人住民は地域社会を支える貴重な担い手となっている。また、日本人と外国人住民が今まで以上に相互理解を深めるとともに、多様な価値観を持った人たちが一つになれるようにシビックプライド^{注*}を醸成することが求められている。そこで、まず、多様性を生かした地域づくりに向け、多文化共生の推進を目的とした市民団体等の取組（地域で活動する外国人住民やグループの活動）を調査し、成果や課題を明らかにする。そして、その調査の結果を踏まえて、「日本人にとっても外国人にも住みやすいまち」という視点で菊川市の魅力を取りまとめ、効果的に発信する方法を検討し提案していく。

3 研究の内容

(1) 概要

調査活動時期：5月～11月に多文化共生講座を行う市民団体（つながる菊Caféプロジェクト）の活動内容と成果を参与観察や活動前後の調査にて明らかにし、成果と課題等を整理していく。そして12月～1月に、市の特徴や魅力を「日本人にとっても外国人にも住みやすいまち」というコンセプトで取りまとめ、市内外に効果的に発信できる方法を模索するとともに、菊川市の良いところを紹介するプレゼンテーション用のPPを作成した。

(2) 結果と考察

多文化共生講座に参加するとともに、その前後に参加者を対象に質問調査を行った。以下は多文化共生講座の参与観察および前後の質問調査の結果をまとめたものである。

① 多文化共生講座の内容

身近な生活課題や様々な生活文化をテーマにした、体験活動や対話を中心としたワールドカフェ形式での講座。テーマの例：民族衣装から衣（異）文化を考える、世界のトイレと

SDGs、情報と消費者、世界のお茶、突撃！世界の食卓事情、お茶から学ぶおもてなしの心、やさしい日本語…など。2時間の内容は、テーマに因んだクイズ、シミュレーションゲーム、共生に関する生活課題のワークショップなどとなっている。

② 質問調査の結果

A. 基本属性に関する質問についての回答結果

回答者数は市民20名（外国につながるのある方2名を含む）で、年代別内訳は図1の通りである。参加理由は図2に示したように、「多文化共生に関心がある」が最も多く、次いで「講座内容に興味がある」、「多文化共生サポーターとして活動する為」「知り合いに誘われた」、そして「教養を深めるため」、その他は「日本語教育の為」「生活に役立つ」であった。

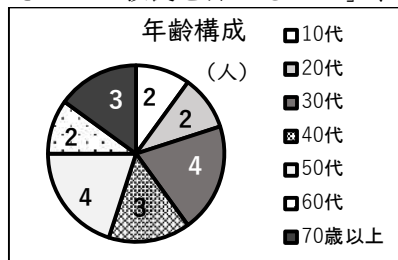


図1 参加者の年齢構成

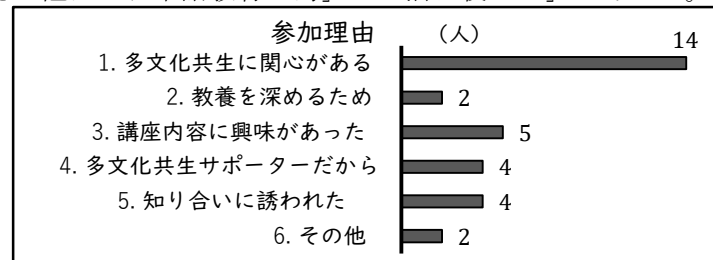


図2 講座の参加理由

B. 多文化共生に関する質問についての回答結果（事前と事後の比較を含む。）

- i) 外国人住民の生活課題への理解：事前でも肯定的回答が多くさらに事後で伸びたことから、外国人住民が生活課題について全体で理解でき共有できたことがわかった。
- ii) 多文化共生への理解の深まり：肯定的回答が、前後ともに上記をさらに上回ったことから、関心の高い参加者の期待にある程度応えることができたと言える。
- iii) 講座で得た知識等の活用：講座で得た知識等を地域・仕事・生活場面等で活用したいと全員が答えていることから、講座のねらい「…多文化共生を図るためには多様な文化の受容や相互理解が必要であることに気付くこと」が達成できたと言える。

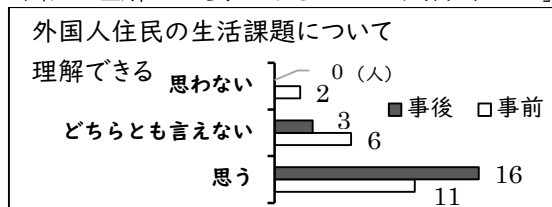


図3-i 外国人住民の生活課題への理解

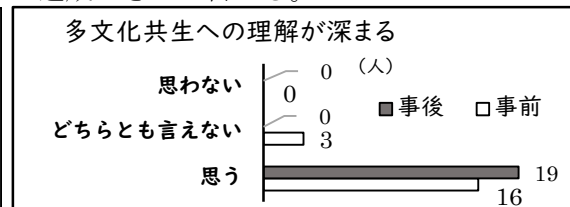


図3-ii 多文化共生への理解の深まり

C. 記述回答の結果（抜粋）

・外国人住民の生活課題を考えたことについて：「言葉がわからない不安がよくわかった」「外国人であるが故の悩みがあることを知った」などの感想から、日本人住民が外国人住民の立場に立って理解に努めようとしたことが理解できる。

また、「一緒に考えることの大切さを感じた」「必要と感じたら、積極的に手を差し伸べたい」などの感想から、解決についても考えることができていることがわかる。

・多文化共生への理解について：「生活問題や異文化体験等について沢山扱ってほしい」「小中学校でも多文化講座をやるべき」「外国人の方と一緒に何かやれたら嬉しい」「文化を知るのは楽しい」等の感想から、多文化共生推進のために更なる拡大が期待されると感じた。

・講座で得た知識等の活用に関して：「仕事に生かしたい」「子どもに体験させたい」「授業で活用したい（大学生）」「今度は多くの外国人の方たちと共に講座に参加したい」等の感想から、参加者にとって役立つ講座内容であったと言える。

・今後の講座で希望するテーマ等：「人間関係づくり」「多様性」「友人関係、家族の関わり方の違い」「ウクライナ難民などへの対応」「外国人の子供の色々な支援」「企業とのコラボ企画」「外国人によるそれぞれの国の文化の紹介」など、講座への期待が感じられた。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

①様々な団体の活動内容と成果を参与観察や聞き取り調査にて明らかにし、成果等を整理していく。そして、②市の特徴や魅力を「日本人にとっても外国人にも住みやすいまち」というコンセプトで取りまとめ、市内外に効果的に発信できる方法を検討しプレゼンする。

(2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

A：①多文化共生講座を行う市民団体(つながる菊Caféプロジェクト)の活動内容と成果を参与観察や活動前後の調査にて明らかにし、成果と課題等を整理していく。

B：②菊川市の特徴や魅力を「日本人にとっても外国人にも住みやすいまち」というコンセプトで取りまとめ、市内外に効果的に発信できる方法を模索するとともに、菊川市の良いところ(まずは皆に町を知ってもらうことを目的に)を紹介するプレゼンテーション用のPPを作成した。

➡ 修正理由：本体験を通して、市民主体で多文化共生を推進していることを含めて、色んな良いところがある素敵なまちであることを発信した方が効果的と考えたから。

(3) 実績・成果と課題

・多文化共生に向けた市民団体の取組について—多文化共生講座の成果と課題—

成果 参加者の肯定回答の割合が元々高いため、事後の変化は少ないものの、多文化共生に関しての興味・関心や意欲が事後にさらに向上していることから、市民に向けた取組は多文化共生推進だけでなく、シビックプライドを醸成させることに効果があることがわかった。

課題 日本人と外国人住民の相互理解の必要性という課題解決をめざした市民協働プロジェクトであるが、外国人住民の参加は7月のやさしい日本語をテーマとした回と12月の世界のクリスマスをテーマにした回のみであった。その際、日頃から外国人に日本語を教えている日本人住民が多く参加したので、日本語が全く話せない外国人住民に対してやさしい日本語で会話をを行った。言葉の問題が気になって参加を躊躇する日本人住民に、まずは多様性受容力を身に付けていただくこと、日本語が十分でない外国人に対してゆっくり話すことや相手の話をきちんと聴くことが大事であることを理解していただくことをやっていかなければならないことがわかった。それから、共に行える講座をやっていくのが良いと思う。

・全体を通して感じた成果と課題

成果 多文化共生講座や日本語支援教室(虹の架け橋教室)への参与観察から、事業を企画運営、あるいはサポートする人たちや、多文化共生を学ぶ市民の姿から、多文化共生社会構築に貢献する市民の思いを体感でき、シビックプライドの醸成の可能性が感じられた。

行政側の貢献も大きく、市民の事業に対して助成することや、市役所のフリースペースを開放し、市民が個々で使用でき、協働の場として効果的に使えるのがとても良いと思った。

課題 メンバーの半数が大学行事等で数回しか多文化共生講座に参加できず、外国人対象の外国人対象の「やさしい日本語」の回に参加できなかった為、全て日本人の講座と思い、外国人との協働がないと指摘してしまった。今後は可能な限り企画運営に参加したい(2名)。大学の行事が重なり、訪問の交渉などを教員にお願いし、自主的な活動が少なかった(2名)。12月後半に外国人学校を訪問し、20人の子どもたちと触れ合えたのは楽しかったが、日本と違いすでに年度が終わっていて授業を参観することができなかった(2名)。

(4) 今後の改善点や対策

・多文化共生に向けた市民団体の取組について：多文化共生講座をより効果的に行っていくための方策は「多文化共生講座の継続、および自治体や他の団体とのコラボ事業による講座の充実」であると考え。対象団体は、この2月に菊川市地域支援課と協働して多文化共生サポーター講座(4日は文化の相互理解のためのワークショップ・11日はベトナムとインドネシアの方によるトーク・18日はブラジルの方によるポルトガル講座)を行う。市とのコラボにより、人材も内容も充実することで、日本人住民と外国人住民、双方のシビックプライドを醸成できる取組となることが期待できると思われる。また、多様な価値観を持った人たちが協働で取り組み、シビックプライドが醸成できるよう、本メンバーも微力ながらも活動をサポートできれば幸いである。

・本研究メンバーが全体を通して感じた改善点や対策：私達も菊川市についてよく知らないが、市民の皆さんも知らないことが多々あることがわかった。例えば、外国人の子供たちが最初に日本語を学ぶ「虹の架け橋教室」、花の名所でもある「代官屋敷」などである。市内外に向けて、多文化共生に関わること、名所旧跡、ここにしかない美味しいもの等々を紹介することも大事であると思ひ、菊川市の紹介PPを作成した。図4はその一部である。

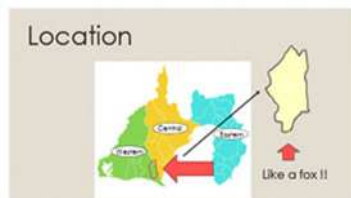


図4 菊川市の紹介PPの一部（取材・作成 田中優衣）

図5 多文化共生講座の様子

5 課題提出者・地域への提言

現在のまちづくりのための市民団体への支援、外国人住民への様々な支援（外国につながる子どもの日本語支援や学習支援など）、そして多文化共生講座等の市民協働型の取組が、菊川市における『シビックプライドの醸成』に有効であると言える。

このシビックプライドについて国内の成功例を見ると、『三島市のまちの文化を「体現する」-街中がせせらぎ事業（三島市）』や『まちに「参加する」-富山市のLRT（富山ライトレール）プロジェクト（富山市）』など、ハード面が中心で、可視出来る事例が多い。本取組はソフト面が中心で不可視的であるため、他とは異なる。しかし、元来シビックプライドは考えや価値観に関する不可視的なものであり、シビックプライドは時間をかけて醸成するものであることから、多くの市民がよりよいまちづくりに参画していることが体感できそれに誇りを持つことを目指して継続的に取り組んでいってほしいと願っている。

6 課題提出者・地域からの評価

今後、人口減少・少子高齢化が一層進むと予想されているとともに、経済のグローバル化が進展し人の国際移動が活発化する中で、外国人住民は地域社会を支える貴重な担い手となっている。令和3年度に策定した「第4次菊川市多文化共生推進行動指針」においても、外国人住民の能力や多様性、独自の視点を地域づくりに生かし、活躍の場を広げていくことで、地域の魅力発信や、地域の活性化につなげていくことを目指しており、市民が自発的に考え実践する地域づくり活動に対し助成する「1%地域づくり活動交付金制度」においても、多文化共生に取り組む市民団体に対して積極的に支援を行っている。

今回の研究では、菊川市内で多文化共生を推進する市民団体「つながる菊Caféプロジェクト」が開催する講座観察やアンケート調査等を通じて、多文化共生講座の企画運営や、サポート、多文化共生を学ぶ姿から、多文化共生という本市の課題解決に積極的に取り組む市民の取組や、思いを知ることができ、シビックプライド醸成への可能性を感じた。

今後は、本研究を通じて取りまとめられた、菊川の特徴や魅力を「日本人にとっても外国人にも住みやすいまち」というコンセプトで紹介するプレゼン資料等を市としても活用し、市内外に効果的に発信していきたい。

（菊川市 企画財政部 営業戦略課 営業広報係長 山崎雄太氏）

注：シビックプライド*：都市に対する市民の誇り。自分がかかわることで、よりよいまちづくりが行われているという当事者意識や自負心のこと。（伊藤香織(2008)シビックプライド（宣伝会議）、伊藤香織(2021)シビックプライドが醸成され市民がまちづくりに参加する社会の実現へ、東京理科大学 <https://www.tus.ac.jp/sdgs/739>）